

# 『成唯識論述記』 訳注 (一)

曾 根 正 人 (執筆責任者)

松 原 光 法

八重樫 直比古

## はじめに

本稿は、『成唯識論述記』二十卷(以下『述記』と略称)の訳注の第一回である。当訳注は、岡山で行われている『成唯識論』『成唯識論述記』講読研究会の成果を土台としている。この会は、仏教大系本『成唯識論』四巻をテキストとして、『成唯識論』とその注疏『述記』を読解する研究会である。読解は、『述記』の引用典籍のほか、基『成唯識論掌中樞要』(以下『樞要』と略称)、慧沼『成唯識論了義灯』(以下『義灯』と略称)、智周『成唯識論演秘』(以下『演秘』と略称)といった他の『成唯識論』注疏も参照して行われている。当訳注は、その成果の一部を世に問うて、中国・日本仏教史研究における唯識仏教理解に貢献することを目的としている。ちなみに研究会における読解は、松原・八重樫・曾根の合議で進められている。よって本稿の執筆は曾根が単独で行い、文責も曾根が負うが、内容は基本的に合議の結果である。

本文読解の前に、『述記』の内容について略説しておきたい。『述記』は、玄奘（六〇二～六六四）訳『成唯識論』十巻の注釈である。著者は、唐代の法相宗開祖慈恩大師基（六三二～六八二）である。成立時期は不明だが、玄奘による『成唯識論』訳出は六五一年末であり、基が没するまでに三〇年近い期間がある。従って、その間に現存の形で完成したと見ることは可能である。ただ内容を細かく見ていくと、章や段落によって論理の緻密さや文章の書き方が区々である等の不統一がかなり出て来る。こうした点からすると、現存の形は未完成稿であった可能性が高い。

注釈対象である『成唯識論』は、インドの世親（ヴァスヴァンドウ）が五世紀頃に、自らの唯識思想の精髓を三〇の偈頌をもってまとめた『唯識三十論頌』一巻の注釈書である。ただ玄奘訳とは言われるが、『成唯識論』は一冊の原本をそのまま翻訳したものではない。『唯識三十論頌』の注釈を作った一〇人の学匠（唯識十大論師）＝護法・徳慧・安慧・親勝・難陀・浄月・火弁・勝友・最勝子・智月）の所説を、護法（ダルマパーラ）説を正義とする立場で対照・紹介したものであり、採訳とされてきた。さらに護法を正義とする立脚点など玄奘の理解が相当反映されている点からすれば、著作とも見なし得る論書である。

この『成唯識論』訳出について、『述記』の補足ノートの著作である『枢要』は、次のように記している。

初功之際、十釋別翻。（中略）數朝之後、基求退迹。大師固問。基懇勸曰、（中略）請。錯綜群言、以爲一本。措定眞謬、權衡盛則。久而遂許。故得此論行。（大正藏第四三卷 六〇八頁b c）

当初十大論師の所説を別々に翻訳していたのが、採訳という方針に変わったのは、基が玄奘に働きかけた結果であり、これによって『成唯識論』は完成することが出来たというのである。自分のみが玄奘唯識教学の正系であるという基の主張を反映した発言であり、これが史実かどうかは不明である。ただここからは、自らの『成唯識論』理解の正統性についての、強い自負が窺われる。基においては、『述記』で展開する自らの『成唯識論』解釈は、すなわち

玄奘の『成唯識論』理解だった。彼にとって『述記』は、自身の『成唯識論』解釈ではなく、弟子のなかで基のみが受け継いだ玄奘の『成唯識論』解釈を開示した書だったのである。

### 【凡例】

テキストは、大正新修大藏經（以下大正藏と略称）論疏部四第四三卷を用いた。ここで留意すべきことは、『述記』には大正藏のそれを含め、信頼性の高いテキストがないことである。そのため大正藏の校訂も、底本は春日版東大寺藏本、校本は明暦元年版本、春日版天海藏本、同法隆寺藏本、大谷大学藏古写本、延暦五年校知恩院藏古写本、康平四年校知恩院藏古写本といった、中国のものではないテキストに依拠している状況にある。そして今日まで、中国の善本テキストは発見されていない。よって本稿の校訂も、そうした制限下にあることを注記しておく。

次いで本稿の構成である。『述記』は、細かく分けた『成唯識論』本文（多くは省略形）を「論」と記して冒頭に提示し、それに「述曰」と記して始まる基の解説・解釈を付したものが、一つのまとまりとなっている。一つ一つのまとまりごとの原文を、最初に置く。次にその現代語訳を置き、必要に応じて補注を付す。原文の『成唯識論』本文引用については、引用文の次の行に二段下げで、『成唯識論』（大正藏第三一巻）原文をゴチック字体で併記する。また『述記』と『成唯識論』の原文には校訂を付し、適宜句点と読点を補う。校訂は、大正藏『述記』の校訂、『枢要』、『義灯』、『演秘』、『述記』引用典籍、および中華大藏経等を参照して行う。

次に現代語訳だが、『成唯識論』引用部は原文のままとする。『述記』の基自身の文章の現代語訳は可能でも、基の『成唯識論』論文の読み方を再現するのは、困難と考えるからである。『述記』『枢要』等に見える基の解釈に沿って、

『成唯識論』論文の意味を汲むことは可能であろう。だが『述記』や『枢要』を読み込んで、基の『成唯識論』の読み方の具体的復原には直結しない。まして現代日本語ですとなれば、なおさらである。よって本訳注では、『成唯識論』の現代語訳は行わない。『述記』の地の文のみについて、現代語訳を行うこととする。

ちなみに本訳注は、巻第一本からではなく、巻第九本の「三性・三無性論」の科段から始める。この科段の訳注を最初に行い、その後冒頭に戻って、残りの訳注作業に入る予定である。こうした順序で行うのは、冒頭から始めると、唯識仏教の核心をなす本科段に至るまでかなりの時間がかかり、その間に作業継続が困難となる場合を考慮した結果である。

【『述記』巻第九本 五三九頁c一七行～二四行】

論。若唯有識、至說有三性。

若唯有識、何故世尊、處處經中、說有三性。

〔『成唯識論』卷第八 四五頁c五行～六行〕

述曰。雖有七頌、釋外難中、而分爲二。

初二頌、答唯有識便違理難。後五頌、答唯有識便違經難。

後中有二。初三頌、釋無境三自性不成難。後二頌、釋有識三無性不成難。

於此初中、有四。初總問。二略答。三徵。四釋。

此即初也。

今難意云。若離內識、外法無者、但有一性、不應說三。經既說三、故非唯識。

〔現代語訳〕

論。若唯意識、至説有三性。

(基が)述べる。七頌(『唯識三十論頌』第一八頌〜第二四頌)は、論敵の論難に答えたもので、二つに分けられる。初めの二頌(第一八頌・第一九頌<sup>(1)</sup>)は、「識のみが有る」という(唯識仏教)説は教理に反する、という論難に答えている。後の五頌(第二〇頌〜第二四頌)は、この説が経の所説に反する、という論難に答えている。

また後の五頌は、二つに分けられる。前半の三頌(第二〇頌〜第二二頌)は、認識対象は無いとするならば、「三性」<sup>(2)</sup>は成立しなくなる、という論難に答えている。また後半の二頌(第二三頌・第二四頌)は、識のみが有るとするならば、「三無性」<sup>(3)</sup>は成立しなくなる、という論難に答えている。

前半の三頌についての『成唯識論』の解説は、四つに分けられる。初めに、問難の概要。第二に、問難に対する簡略な答え。第三に、論敵の反論。第四に、反論に対する釈明である。

この論文は、初めの問難の概要である。

問難の趣旨は、以下の通りである。(唯識仏教のように)心内の識と無関係に心外に有るもの(「法」)はないとするならば、その識は一つだけのはずだから、性が三つ有ると説くことは出来ない。また経が三つの性を説いていることからすれば、識は一つではないことになる。

〔補注〕

- (1) 第一八頌「由一切種識。如是如是變。以展轉力故。彼彼分別生」についての『成唯識論』解説は、巻七の「釋分別生難」においてなされている(三九頁c二八行以下。『述記』注釈は第七末 四九四頁c三行以下)。

第一九頌「由諸業習氣。二取習氣俱。前異熟既盡。復生餘異熟」についての『成唯識論』解説は、卷八の「釋生死相續難」においてなされている（四三頁a八行以下。『述記』注釈は第八本 五一四頁c一二行以下）。

(2) 「三自性」ともいう。「遍計所執性」、「依他起性」、「円成実性」という三つの性のこと。存在の在り方を三つに分類した唯識仏教独自の説であり、中心教説の一つ。『成唯識論』では、卷三で『大乘阿毘達磨集論』を教証として第八識（阿頼耶識）の存在を証明する箇所に初めて見える（一四頁b一八行〜一九行）。『述記』注釈は、第四本 三四九頁c一九行〜三五〇頁a八行。

(3) 「三無自性」ともいう。「三性」を何が無いかという方向から捉えた教説。「遍計所執性」は存在の実体が無いことから「相無性」、「依他起性」は存在が自力で生ずることが無いことから「生無性」、「円成実性」は最高の真実として自性が無いことから「勝義無性」と定義される。『述記』では、ここが初出。

【『述記』卷第九本 五三九頁c二五行〜二七行】

論。應知。三性亦不離識。

應知。三性亦不離識。

述曰。此略答也。

非説性有三、便非唯有識。即不離識、而説三故。

〔『成唯識論』卷第八 四四五頁c六行〜七行〕

〔現代語訳〕

論。應知。三性亦不離識。

(基が)述べる。この論文は、問難への簡略な回答である。

(唯識仏教は)性が三つ有るならば、すなわち識は一つではあり得ない、とは説かない。一つの識を離れることなく三つの性が有る、と説くのみだから。

【『述記』卷第九本 五三九頁c二八行】

論。所以者何。

所以者何。

〔『成唯識論』卷第八 四五頁c七行〕

述曰。外人詰也。三不離識之所以者、何等是耶。

〔現代語訳〕

論。所以者何。

(基が)述べる。この論文は、論敵が反論した詰問である。「三性」が識を離れないとする根拠は何か(と詰問している)。

【『述記』卷第九本 五四〇頁a一行〜一四行】

論。頌云。至非不見此彼。

頌云。由彼彼遍計。遍計種種物。此遍計所執。自性無所有。(第二〇頌)

依他起自性。分別緣所生。圓成實於彼。常遠離前性。(第二一頌)

故此與依他。非異非不異。如無常等性。非不見此彼。(第二二頌)

〔成唯識論〕卷第八 四五頁c七行、一三行

述曰。下廣答也。

頌中有三。初二頌、辨三性。後一頌初三句、明性一異。第四句、明內證時、圓成依他、先後證見。

初二頌中初一頌、解初性。次半頌、解依他。次半頌、解圓成。餘文可解。

下釋之中、文分爲二。初釋頌文。後諸門解釋。

解本頌<sup>(1)</sup>中、文復分二。初別解頌文。後此中意說以下、總釋頌意、結答所問。

別釋頌中、文又分三。初辨三性。次辨不異一義。後辨證見先後。

別解三性、文分爲三、或分爲二。初釋第一頌、遍計所執性、及解次半頌、依他起性。相對明故、合爲一也。後解餘半頌、圓成實性。

初中分二。初但解遍計所執。後合與依他對明。

〔本文校訂〕

(1) 大正藏甲本(明曆元年版本)では、「頌」は「解」となっている。

〔現代語訳〕

論。頌云。至非不見此彼。

(基が)述べる。以下の論文は、(反論に対する)詳しい釈明である。<sup>(1)</sup>

論文引用の頌は、三つに分けられる。初めの第二〇頌と第二二頌は、「三性」の内容を説明している。後の第二二頌のうち初めの三句は、「三性」の同異を明らかにしている。最後の第四句は、内心で悟るときに、円成実性と依他起性を見極める前後関係を明らかにしている。

初めの第二〇頌と第二二頌のうち、第二〇頌は遍計所執性を解説している。第二二頌の前半二句は依他起性、後半二句は円成実性を解説している。これ以外は、読めば解るであろう。

続く論文の頌文解説は、二つに分けられる。初めは、頌文自体を解説している。後は、問題枠組を設定して枠組ごとに解説している。

頌文自体の解説も、二つに分けられる。初めは、頌文(の語句)を個々に解説している。後の「此中意説」<sup>(2)</sup>以下は、頌の意味を総括説明したうえで、設問に対する答えを結んでいる。

頌文(の語句)の個々の解説は、三つに分けられる。初めに、「三性」一つ一つを解説している。次に、「三性」が全く異なるものでもなく、また同一のものでもないことを解説している。最後に、円成実性と依他起性を見極める前後関係を解説している。

「三性」一つ一つの解説は、三つないし二つに分けられる。初めに第二〇頌の遍計所執性を解説し、さらに第二二頌前半の依他起性を解説している。遍計所執性と依他起性を対照させて解説しているので、合わせて一つになる。後は、第二二頌後半の円成実性を解説している。

前半の解説を二つに分ける場合は、前段は遍計所執性のみを解説、後段は遍計所執性を依他起性と対照させての解説ということになる。

[補注]

- (1) 『成唯識論』卷第八 四七頁c一六行まで。『述記』卷第九本 五五四頁b八行まで。  
(2) 『成唯識論』卷第八 四六頁c七行。『述記』卷第九本 五四七頁c一二行。

【『述記』卷第九本 五四〇頁a一五行～二四行】  
論。周遍計度、故名遍計。

論曰。周遍計度、故名遍計。

〔『成唯識論』卷第八 四五頁c一四行〕

述曰。解所執中二說。此卽是前難陀等解。

釋初句頌、遍計二字。周義釋遍。度義釋計。

唯第六識、能周遍計度。

第七識等、是此類故、亦名遍計。但可名計、而非遍故。今依正義。

由此應作、四句分別。

有遍而非計。謂無漏諸識。有漏善識等、能遍廣緣、而不計執者。

有計而非遍。謂第七有漏識。

有亦遍亦計。謂有漏染污我法執、第六識等。

有非遍非計。謂有漏五識、及第八識等。

〔現代語訳〕

論。周遍計度、故名遍計。

(基が)述べる。遍計所執性の解釈には二説がある。ここからの論文は、前に見た難陀等の解釈である。<sup>(1)</sup>

まず第二〇頌第一句の「遍計」の二字を解釈する。「周」という意味に「遍」を解釈し、「度」という意味に「計」を解釈している。

(八識のうちで)第六識のみが、(すべてについて)周遍<sup>おもむく</sup>く誤った計度<sup>はからい</sup>をする。

第七識等もこの類いなので、同じく「遍計」と名付けることが出来る。但し、それは「計」とは言えても「遍」ではないからという理由で除外する解釈もある。<sup>(3)</sup>『成唯識論』は、護法の正義に依って(第六識と第七識を「遍計」と)解釈している。

以上の論文の趣旨を踏まえて、次のような四句分別を作ることができる。<sup>(4)</sup>

或るものは、「遍」であるが「計」ではない。すなわち無漏の諸識と、有漏の善識等で、あまねく広く縁じて対象に執着して誤った計らいをすることがないものである。

或るものは、「計」であるが「遍」ではない。すなわち有漏の第七識である。

或るものは、「遍」でありかつ「計」である。すなわち有漏で煩惱に覆われた我執と法執を伴う第六識等である。或るものは、「遍」でもなく「計」でもない。すなわち有漏の前五識と第八識等である。

〔補注〕

(1) 『成唯識論』卷第八 四五頁c 一九行「推徴不可得故」まで。『述記』卷第九本 五四〇頁b 二八行まで。

(2) 直接には、卷第七末 四八七頁b 二六行〜c 七行に引く難陀説を指すと考えられる。但し根底に踏まえてい

るのは、『成唯識論』卷第三 一〇頁 a 二〇行 c 一〇行、『述記』卷第三本 三二七頁 b 一六行 c 三三〇頁 c 九行に認識構造を説明する説として挙げられている。「二分説」(難陀等の説。「見分」「相分」の二要素で説明)、「三分説」(陳那等の説。「見分」「相分」「自証分」の三要素で説明)、「四分説」(護法等の説。「見分」「相分」「自証分」「証自証分」の四要素で説明)のうちの、「二分説」(『成唯識論』一〇頁 a 二〇行 c b 一行、『述記』三二七頁 b 一六行 c 三二八頁 b 一〇行)である。

(3) 安慧説など。『述記』卷第九本 五四一頁 a 二六行 c b 五行。

(4) 深浦正文『唯識学研究』下巻五二二頁は、この文章の「此」を、直前の「正義」のみを指すものと解している。

【『述記』卷第九本 五四〇頁 a 二五行 c b 一行】

問。此遍計、何名彼彼。

論。品類衆多、至虚妄分別。

品類衆多、説爲彼彼。謂能遍計、虚妄分別。

述曰。以此計心、品類衆多、或二三等。至下當知。

説爲彼彼。此體是何。

謂能遍計、虚妄分別。卽是一切、能起遍計、依他性心。

將釋第二句。却解上句、并釋由字。

(『成唯識論』卷第八 四五頁 c 一四行 c 一五行)

〔現代語訳〕

問。この「遍計」について、(第二〇頌は)なぜ「彼彼」と言っているのか。

論。品類衆多、至虚妄分別。

(基が)述べる。この「(遍)計心」は種類が多く、二・三種類くらいになるからである。これについては、後の解説で了解されよう。<sup>(1)</sup>

(問)「彼彼」と説かれているもの、その本体は何か。

(答) 遍く誤って計らう間違った分別である。すなわちそれは、すべての遍く誤った計らいを起こす依他起性の心である。

この論文は、(第二〇頌)第二句を解説するに当たり、さかのぼって第一句を解説し、併せて同句の「由」の字についても解説している。

〔補注〕

(1) 『成唯識論』巻第八 四五頁c二二行〜四六頁a一〇行。『述記』巻第九本 五四〇頁c一五行〜五四三頁b五行。

【『述記』巻第九本 五四〇頁b二行〜四行】  
論。即由彼彼、至所遍計物。

即由彼彼虛妄分別、遍計種種所遍計物。

『成唯識論』卷第八 四五頁c一五行～一六行

述曰。妄分別故、遍計種種所遍計物。  
物者體也。即能計心、起所執也。

〔現代語訳〕

論。即由彼彼、至所遍計物。

(基が)述べる。間違つた分別のために、種々の所遍計物(遍く誤つて計らう対象)すべてに、遍く誤つた計らいをしてしまふのである。

(第二〇頌の)「物」とは、本体である。誤つた計らいをする心が、執着する対象として起こすのである。

【述記】卷第九本 五四〇頁b五行～一八行

此體是何。

論。謂所妄執、至自性差別。

謂所妄執、蘊處界等、若法若我、自性差別。

『成唯識論』卷第八 四五頁c一六行～一七行

述曰。此性即是、所虛妄執、蘊處界等、一切義理。若法若我、此二種中、自之體性、及差別義。

此即心外、非有法也。即是由有能計心體、計有物也。

上句遍計之言、出能計心等體。以遍計行相、顯其法體。

第二句中、遍計之言、即能遍計心之行相。

前以行相、出彼法體。後以行相、明起計失。

問。此所計法、自性非有。何故名物、及名種種也。

答。隨能計心、故說爲物。心多品故、說爲種種。體非種種也。

又所計無法、亦可名物。有無二法、皆名物故。

言種種者、隨能遍計妄分別心、計此無物、當情亦有種種相故。

〔現代語訳〕

(問) この「物」の本体とは何か。

論。謂所妄執、至自性差別。

(基が)述べる。その本性(本体)は、心が誤って執着している対象であり、蘊・處・界などすべての「義」と「理」である。「義」としては「法」であれ「我」であれ、その本体の固有性と特殊性のすべてである。

それらは、「理」としては)心外にあるもので、実体を持たない(「非有)ものである。誤って計らう心という本体があるために、それらを誤って実体を持つ(「有)ものと計らうのである。

(第二〇頌)第一句の「遍計」の語は、誤って計らうという心の本体として提示したものである。遍く誤って計らうという働き方をもって、その心というものの本体を明らかにしている。

第二句の「遍計」は、遍く誤って計らうという心の働き方を指す。

前者は心の働き方をもって、その心の本体として提示している。後者は心の働き方をもって、その誤った計らいを起

こすという欠陥を明らかにしている。

問。(これまでの説明によれば) 誤って計らう対象は自性が有ではない。それなのになぜ(第二〇頌は、有であるかのように)「物」としたり「種種」としたりしているのか。

答。遍く誤って計らう心に從えて説明しているので、「物」と言っているのである。その計らう心の側に在り方がいくつもあるから、「種種」と言っているのである。計らう対象が、実体として「種種」有るわけではない。

また計らう対象が無であっても、「物」と名付けられるのである。(計らう対象であれば)有でも無でも、みな「物」と名付けられるからである。

「種種」と言うのは、遍く誤って計らう間違った分別心に從えて、無であるものを誤って有と計らうとき、その時々心に「種種」の様相があるからである。

【述記】卷第九本 五四〇頁b一九行〜二二行】

論。此所妄執、至所執自性。

此所妄執、自性差別、總名遍計所執自性。

述曰。解第三句。

此第二句、所妄執、心外法我、自性差別、體性非有。如龜毛等、體定無故。

總名遍計所執自性。

〔現代語訳〕

論。此所妄執、至所執自性。

(基が)述べる。この論文は(第二〇頌)第三句の解説である。

第二句の指す、誤って執着されている心外の様々な「法」と「我」の固有性も特殊性も、本体の自性は有ではない。例えば亀の毛などと同じく、その本体は絶対的に無だからである。

以上を総括して、遍計所執の自性と呼ぶのである。

【『述記』卷第九本 五四〇頁b二三行〜二八行】

論。如是自性、至不可得故。

如是自性、都無所有。理教推徴、不可得故。

〔『成唯識論』卷第八 四五頁c一八行〜一九行〕

述曰。次第四句。

如是第三句、遍計所執、自性都無所有。非少可有、故名都無。依他性法、少可有故。

何以知無。

理教二法、子細推徴、不可得故。如前第七卷等、所引理教。

此即一翻。但解初性。

〔現代語訳〕

論。如是自性、至不可得故。

(基が) 述べる。次に(第二〇頌) 第四句の解説である。

既述のように第三句の「遍計所執」の自性は、有である所はまったくない。少しも有ではあり得ないから、「都て無<sup>すべ</sup>」  
というのである。またそれは、依他起性というものが部分的に有であることと対比して「都無」というのである。

(問) 何によって、無ということが知られるのか。

(答) 教理と教説という二つの方法をもって詳細に究明していくと、(有ということは) あり得ないという結論となるからである。前の第七卷等で引いた、教理と教説に見る通りである。<sup>(1)</sup>

以上が第一師(難陀等)の説であり、遍計所執性のみについての解説である。<sup>(2)</sup>

〔補注〕

(1) 『成唯識論』第七卷 三九頁 a 四行〜c 二八行。『述記』卷第七末 四八八頁 a 一八行〜四九四頁 c 二行。

(2) 『述記』五四〇頁 a 一三行〜一四行の科段「初但解遍計所執」に当たる。

【『述記』卷第九本 五四〇頁 b 二八行〜c 一行】  
下第二師釋。

初略但釋初頌。後廣對依他、兼釋次半頌。

論。或初句、顯能遍計識。

或初句、顯能遍計識。

〔『成唯識論』卷第八 四五頁 c 一九行〕

述曰。義與前同。

〔現代語訳〕

以下の論文は、第二師の説である。<sup>(1)</sup>

初めは、簡略にただ第二〇頌を解説しているだけである。次に詳しく依他起性も踏まえて、併せて第二二頌の上二句も解説している。

論。或初句顯、能遍計識。

(基が) 述べる。(第一句の) 解釈は、前の第一師と同じである。

〔補注〕

(1) 『成唯識論』卷第八 四五頁c二二行「已廣顯彼不可得故」まで。『述記』卷第九本 五四〇頁c一一行まで。

【『述記』卷第九本 五四〇頁c二二行〜六行】

論。第二句、示所遍計境。

第二句、示所遍計境。

〔成唯識論』卷第八 四五頁c一九行〜二〇行〕

述曰。所依執處。與前師異。此以理言、通彼依他圓成二性。下自當知。

然攝大乘等、但說依他。安足處故。稍相近故。凡夫境故。易可知故。

理通成實。

〔現代語訳〕

論。第二句、示所遍計境。

(基が)述べる。(第二句の「所遍計境」は)依拠として執着する場所を指す。前師とは異なる。これは教理からすれば、依他起性と円成実性の二性に通ずるとする。この解釈については、後の解説で自ずと知ることができよう。<sup>(1)</sup>

一方『撰大乘論』等は、依他起性のみに通ずると説く。<sup>(2)</sup>それは、依他起性は「遍計種種物」が成立する場所だからであり、(円成実性よりも「遍計種種物」ややと近接しているからであり、(円成実性とは違い)凡夫の認識対象だからであり、(円成実性よりも)認知しやすいからである。

教理からすれば、円成実性に通ずるとするのである。

〔補注〕

(1) 『成唯識論』巻第八 四六頁 a 二行〜一五行。『述記』巻第九本 五四三頁 b 七行〜c 五行。

(2) 『述記』で『撰大乘論』の引用としてある箇所多くは、玄奘訳『撰大乘論本』ではなく、世親『撰大乘論釋』(以下『世親釈』と略称)や無性『撰大乘論釋』(以下『無性釈』と略称)の引用である。ただこの箇所に関しては、『撰大乘論本』(大正藏第三一卷 以下これによる)巻中一三九頁 b 一〇行〜二三行に該当記述がある。

【『述記』巻第九本 五四〇頁 c 七行〜一二三行】

論。後半方申。至不可得故。

後半方申。遍計所執、若我若法、自性非有。已廣顯彼不可得故。

〔成唯識論〕卷第八 四五頁c二〇行〜二二行

述曰。後半頌、即下二句。方申、遍計所執性義非有。前第七卷中、已廣顯非有故。

然如攝論第四五卷説<sup>(1)</sup>。能遍計、即此初句。所遍計、即此第二句。遍計所執自性乃成、即此中下半頌。

上但重解、初頌所執。

〔本文校訂〕

(1) 玄奘訳『撰大乘論本』は全三卷であり、第四卷・第五卷は存在しない。よってこれは、『世親釈』か『無性釈』もしくはその両方の意味と取るしかない。ただどちらも、第五卷に該当記述は見えない。よって「五」は衍字の可能性が高い。一方『世親釈』(大正蔵第三二卷 以下これによる) 卷第四 三四一頁b五行〜九行、『無性釈』(大正蔵第三二卷 以下これによる) 卷第四 四〇三頁c二行〜四〇四頁a一四行には、該当記述と見なされるものがある。よってこの文言は、これらを指すものと解する。

〔現代語訳〕

論。後半方申。至不可得故。

(基が)述べる。「後半頌」とは、第二〇頌の下二句である。「方申」とは、(まさに)遍計所執性の内実(「義」)は有ではないと申し述べている。前の第七卷で、既に詳しく有ではないことを明らかにし終えているからである。<sup>(1)</sup>

一方『撰大乘論』第四卷・第五卷<sup>(衍)</sup>の説によれば、能遍計(遍く誤って計らう心)の説明がこの第一句であり、所遍計

(遍く誤って計らう心の対象)の説明がこの第二句である。能遍計と所遍計の上に遍計所執の自性が成立していることとの説明が、後半の第三句と第四句である。

以上は、ただ第一師の解釈に重ねての、第二〇頌の遍計所執性についての第二師の解釈である。

〔補注〕

- (1) 『成唯識論』第七卷 三八頁c 二三行〜三九頁c 二八行。『述記』卷第七末 四八六頁c 一一行〜四九四頁c 二二行。